ゲンロク第2巻第11号通巻No.17
昭和62年11月1日発行（毎月1回1日発行）

CAR ENTERTAINMENT MAGAZINE

GENROQ

ゲンロク

11 580yen
1987 Nov.

詳密速報＝52回フランクフルト・ショー
スペシャル・チューナーの最新作が目白押し

イオタの仕掛人＝フーベルト・ハーネ氏が語る
スーパー・カウンタックの全貌
げ・ん・ろ・く オリジナル1/24モデルで実車を再現する!!

オーバー300km/hの猛禽
RSチューン・ポルシェ935の迫力

話題の国産ニューモデル
クラウン／ブルーバード／シビック

林ミノル氏

モノクロームの青春時代――いまやサクセスストーリーのほうがお似合いの林ミノル氏にもそんな季節があった。

林氏が過ごした青春時代は、誰もが何事においてもエネルギッシュに突き進んだ60年代である。そんな60年代に青春時代を過ごした彼は、とにかくクルマが好きで、毎晩のように宝ヶ池周辺（京都＝のちに宝ヶ池サーキットという俗称がついた）を走りまわった。そして、鈴鹿サーキットへレースを見に行くことが大きな楽しみだった。

外国のサーキットの写真を見ては溜め息をつき、マシンを見ては想いをふくらませる――そんな毎日だったという。

「もし、エスロク（ホンダS600）が手に入ったら、まず、エンジンをおろして、ここをこうして、フレームはこうして……なんて、いつもそんなことを考えていたんです」

とにかく自分のクルマを作って走らせたい。イマジネイティブな林氏にとって、理想のマシ

林ミノル（はやしみのる）　株式会社「童夢」代表取締役社長　1945年、広島県生まれ。大阪産業大学自動車工学部中退。趣味の多彩さはつとに有名な粋人。この6月に童夢新社屋が完成し、夢に仕事に新たな情熱を燃やす。

Retrospection 60's

——新しい時代を探るために

60年代が生んだ超ユニークな個性

ンがハッキリと浮かんでくる。

さっそく費用を調べてみた。お金はいくらかかるんだろう。が、あまりの高さに手も足も出せなかったという。スポンサーを捜したところで、20歳そこそこのヒヨッコの言うことに誰も耳をかそうとはしない。

「他の大人達ができないことを、お前みたいな若造にできるわけがないだろう」

そんな現実の中で、林氏なりにクルマ作りを試みたが、いつも失敗に終わった。挫折感と、かなわぬ夢の中を往き来しては、悶々とした日々を送っていた。モノクロームの季節である。

クルマが好きで、その情熱だけは煮えたぎり、誰にも負けぬ思い入れがありながら、それを手に入れるためのお金がなく実現できない状況。そんな欲求不満が、林氏の青春時代をグレイ・トーンに染めていった。

「あの感覚が、いまだに体に刻み込まれているんだよ」と林氏はいう。

が、何かを実現させるために別の何かを犠牲にするというのは、林氏の性に合わないのだ。

現在の生活についても、林氏はこんなふうにいっている。「うまいものを食べ、スポーツをし、適当に遊ぶ。そういった生活を失うことなく、本来の目標を実現させていきたい」

何かを犠牲にして何かを得るのでは満足できない。ストイックに何かをやり遂げるなんてことは、林氏にとっては、少しも良いことではないし、素晴らしいことでもないのだ。宮沢賢治の小説に、すべてを犠牲にしてトンネルだけを掘りつづけた男の話があるが、「それがどうした。何ぼのもんや」と思えるというのだ。

大切なのは、トンネルを掘るだけじゃなく、もっと広く、すべてのことに好奇心を持ち、知識を広げ、深めること。〝物〟をチョイスするにも、10の中から選りすぐって選ぶのと、ただやみくもに選ぶのとでは雲泥の差がある。本でもいい。音楽でもいい。できる限りのことを吸収し、消化し、己を刺激し、それからやりたいことをチョイスしても少しも遅くはない。

林氏の場合、このような時期がモノクローム の季節の中に埋没してしまった。トンネル掘り＝クルマ・オンリーの生活のためにスポンと抜けてしまったのである。「人生を辞書に例えるならば、自分の辞書は〝青春〟という項が脱落してしまったようなもの」と林氏はいう。「これからは、もっと自分の人生の辞書作りを大切にしなければいけない」——と。

若い頃、クルマ・オンリーのストイックな生活が送れたのは、若さゆえのひたむきさだったかもしれない。が、自らをコントロールする術もなく、ただ真っしぐらにノーコンの模型飛行機のように飛んでいただけだった、と林氏は振り返る。

「若い時にパワーのない奴は年をとってもパワーが無い〟なんて誰が言いきれるだろう。人間の持つ可能性なんて常に無限大なのだから、あせることは何ひとつないよ」

自らの青春を回顧するとき、そのモノクロームの青春は、ただひとつの心残りであり、後悔になっている。

「燃え盛った60年代。今でこそいえることだが、もっと違った青春時代を送りたかった。が、こんなふうに自分の人生を振り返って後悔できること。それもまた、いいのかもしれない。そして、人に何を言われようと変えられないと思えることに出会ったら、それこそ自分にとっての真実だ。それ以外はまやかしさ」

林氏は、このことだけは60年代——青春時代から変わらずに貫いてきた。

自分自身の真実。とにかくクルマが好きだということ。そしてあこがれたコーリン・チャップマン、ジム・ホール、そしてカロッツェリアの世界……。すべてはモノクロームの世界に埋もれてしまったが、それらの夢をベースにして、今の現実がある。

自らの〝歴史〟を冷静に、そして厳しく見詰める林氏。彼は、つぎのようなこともいっている。

「若いときに、あんなモノクロームに塗りつぶされた時期を経なくても、現在と同じ状況の自分は存在していただろう」

これはたいへんな自信である。

「求めているものが同一である限り、遅かれ早かれ道はいっしょ。同じ位置に到達するだろう」といい切る。

ひとつのものにだけこだわって、ストイックな青春を送る必要はない、という考え方。60年代を生きてきたひとつのユニークな個性といえようか。